事、源氏常夏の卷に、あふみの君が手うたぬ心ちし侍れとあるこれなり、おなじ條に同じ君がせうさいせうさいとのたまふも、はやく絶たる彼口遊にはあらずや、小采にては聞えがたきやうなり、近き承應の口遊すら、今しれざるが多し、ましてや源氏の頃の俗語考へうる事かたかるべし、予雙六はたゞ並べるのみをおぼえし故にや、世話燒草に記し詞解せざるうちに、追まはしといふ事は、童のときならひたり、〇中略、宋堺

俳諧崑山集慶安四年印本　鹿田のさい目し、の角ふるや追まはし　三德

俳諧天水抄慶安五年寫本、前句印本とは別本、　まづはきれたり〳〵　附句　打續きよ目の出たる追まはし　貞德

夢見草明暦二年休安撰　暮て行年や雙六追廻し　義陳

昔はおこなはれしとおぼしく、是等の句多くあり、又五ケの津餘情男元祿十五年印本に、芝居の時このはやり歌、二上りの三味線にのせて、拍子もかまはずわめき、是もおもしろうないと、追まはしのおりは雙六などいふ事あり、

〔宴曲抄上〕雙六

我朝の近比、道々に長せる人を得給、一條の院の御宇とかや、主殿寮に侍し丹治の比手勝は、雙六の譽世に勝、名を又異朝におよぼし、藝を化人に感せしむ、時は南呂無射かとよ、此正に長夜もすがら、獨明月にうそぶき、大内山に木隱、彼方此方にさすらひて、右近の馬庭を行過、緣の松原にたたずむに、松嵐梢に冷敷、虫の音藪にゑげくして、五更に夜閑なりしに、松の上に聲有て、汝が好長ずる道を感じて、昔の殷の目揚令こゝに來れり、恐るゝ事なかるべし、雌雄を決せんと望しかば、比手勝更に恐ず、則勝負に向て、はるかにときをうつすまで、數を競て良久し、夜既に明なんとせしかば、日比の執心是なりと、慰にかたらひを成つゝ、紺碧瑠璃犀角の調度をかたみとおぼしく